

新約単篇 ヘブライ書の福音

言葉が生きるとき  
(1988年ギリシャ語開講の辞)

ヘブライ 4:12

「神の言葉は生きている。そして力を発揮する」とヘブライ書の著者は書きました。同じ趣旨の事をパウロは「聖書はどこもみな神の息が込められているのだ」とテモテに教えました。神の息はもちろん聖霊です。この聖霊の込められた言葉が「神の人が使いものになるまで磨いてくださる力をもつ」と言うのです。

「聖霊が人を回心させる」という言い方は、キリストの教会運動では注意ぶかく避けられてきました。それにはそれなりの事情も理由もあるのですが、大事なことに目をふさいで来たきらいもあります。私などが若造のころ、「それでも『聖霊によらなければ誰も“イエスは主である”とは言えない』のじゃありませんか？」など言おうものなら、「それは文脈の趣旨ではない」と先輩がたからお叱りを受けただけでなく、それはプロテスタントの悪い聖霊理解、危険な聖書観だからと、しばらくはお説教を食いました。

小著「キリストの教会について」の中でほんの少しだけ、かなり抑えた皮肉をもらしましたように、信仰の決断というのは、人間の理性がナザレのイエスについてのデータを前にして、「これを信じるか、信じないでおくか？ エイ！ 信じるに決めた」と主体的に判断を下すことである。それ以上に聖霊の光りとか、助けのようなものを持ち込んではいけない……ような傾向が、今日もなお運動の一部にはあります。ジョン・ロックがこの運動に与えた影響の副産物みたいなものでしょう。

マケドニアのフィリピ郊外にあった川岸の祈り場で、ユダヤ系の婦人リデ

ディアがパウロの説く福音を聞いて、回心に導かれる場面が使徒行伝の16章にあります。「主が彼女の心を開いてパウロの語る内容に引き入れた」とでも訳しましょうか、主ご自身が介入して、リディアを開眼させなされたのですが……。こういう、肉の人間がどうしても信仰の決断に踏み切れない、最後の最後まで抵抗を覚えるところ、人間の無力、不可能とも見える所をパッと乗り越えさせる決定的な駆動力……。ルカの言葉で言うと「主が彼女の心を開いた」としか言いようがないそれを、一体どう言い直せば誤解を受けないで先輩がたに分かって頂けるか、というのが我が若き日の悩みでありました。

「神の言葉は ἐνεργής である」というヘブライ書の主張、「聖書はどこも θεόπνευστος で生きている」(2テモ3:16)というパウロの告白、また「主がりディアの心を開いたからパウロの語る内容にも身を入れて聞き取れた」(使16:14)というルカの描写を理解するのに、大きく分けて二通りの説明の仕方があるようです。

一つは「神の言葉そのものは単なる音声か、記号の連続で死んだ文書だが」とまず前提する姿勢です。どんなにギリシャ語やヘブライ語を正確に知っていても、そこから出てくるのは「納得。そういう意味か!」という事以上ではあり得ない。打ち砕かれて「アーメン、主よ!」と告白する信仰はそこからは来ない。本当は御言葉を読むその人の上に、文字や記号の聖句以外の所から聖霊の解明があって初めて、人は十字架の主の前にひれ伏すことができるのだ。人が信仰の判断など下すのではない。聖霊が信じさせるのである。……これは真実の一面をよく表しています。

これに対して、そんな「死んだ文字の文書以外の所から、聖霊が働くと考えてはならない」という反省もあります。書かれた御言葉そのものが、パウロによれば神の息吹なのだから、人は謙遜に御言葉に対する時に、言葉や文章そのものに内蔵された聖霊にじかにぶつかると思えよ。聖霊が御言葉そのものを通して、その人に働きかけ、彼の決断を生みださないでは置かない力

を持つ。ここで「聖霊が回心させる」と言わない人も、御言葉が聖霊と一緒に……なら良いと言うでしょう。ただその最後の「エイ」だけは人間がするので、という聖域みたいなものは残しておきたい人の方が多いようですね。この運動全般の傾向としてです。

大体、御言葉——聖霊——人の霊と判断力がかかわる「回心のメカニズム」などは、決して人間に分析できるものではありません。「救われている」という意識のメカニズムなら、頭の切れる人にかかれば「神学 A、神学 B、神学 C」というような形で新書版一冊に展開もできます(講談社現代新書 179)。けれども「アーメン、主よ、信じます」という瞬間に何がどうなってどう働いているかは、私どもには確かめようもないし、また確かめようとしてはならない事なのでしょう。ただ、同じ御言葉に触れて、同じ聖霊の駆動を受けながら、「アーメン」という人もあれば、「そうではない。私は御免被る」という人もあることの疑問……というより悲しみはそのまま残ります。これは解決不可能の問題です。

この夏、私は一つの小さな経験をしました。笑って頂いてもいいような、御愛嬌みたいなことなのですが……。42年間、生きた人間と話す機会がなくて、全く錆びて使えないと思っていた中国語が、ある中国人を前にしたら「曲がりなりに」自分の中から少しずつ出てきたのです。当日同席なさった方には隠せませんが、お世辞にも流暢と言えるようなシロモノではありません。でも、あの日から、大袈裟な言い方を許して頂くなら「私の中で中国語が復活した」のです。これは嬉しかったことも嬉しかったが、とてもショックでした。

少し飛躍するかも知れませんが、言葉が通じるとか、言葉を知っていると、言葉が生きていくとかいうのは、どんな場合か……考えてみた事がおありでしょうか？ それは単語を何千語知っているとか、文法どれだけ正確に頭に入っているか、ということではなく、一人の人を知っているか、いや知

りたいか……という事なんです。愛している……とまでは言いません。もう少し抑えて、「その人から聞きたい内容がある。その人に伝えたい、知って欲しい内容がある。いや、その人の心を知りたいし、私をも知って欲しい！」……その国語を使ってです。

ここで引き合いに出すのは、あまり下世話な話なので、ちょっと躊躇もするのですが、こんな話を聞きました。近所に住む中国語の先生から聞いたのです。近所の主婦の方で、家内は何年も前からの付き合いなんです。私は10日ほど前が初対面でした。彼女が言うには、初級のクラスに来ているある熱心なお嬢さんが、「先生、私の勉強の動機は、ちょっと言うのも恥ずかしいような事なんです。こんな不純な動機から中国語をやったら、ものにならないでしょうか……？」と心配そうにおっしゃる。何でも中国から仕事で日本に来ていた青年と恋をした。「私、彼の事をもっと知りたいんです。自分のことも知って欲しい。それだけなんです。こんな生徒が先生のクラスにいて失礼にならないかと思って正直に白状します。」先生はそのお嬢さんに「あなた、それで真剣にやったら、あなたの中国語、多分モノになるかもよ」と言って励ましてあげたそうです。

その話をまた晩に思い出して、一人で笑っていたのですが、次の瞬間わたしは「アッ」と声を立てそうになって、ワープロの鍵盤から手を離しました。いったい、私は何をしているというのでしょうか……？ 同じじゃないか、これは！ 家内が時々心配して、「あんた。また目ェから血ィ出るで」と注意するくらい、夢中になって、私は中国語の字のソフトを作っていたのです。シャープの器械で打った大東局消印の手紙、あるいは一回か二回で立ち消えになるか。それとも「命の水」計画の守部さんから買った新しい聖書の内容を、舌足らずの不正確な中国語でも、少しずつ説明する手紙が、10月から上海に向けて、ホントに続くのか……自分でも自信はありません。何年前か、獄中の李さんに送った韓国語のは、恥ずかしいが続かなかった。日本語でも届くように事情が変わってからですね。大きいことは言えません。

今朝の話は、本当は中国語じゃないんです。さっき私は一つのショックを経験した、と申しました。言葉が生きるのは、また死んでいた言葉に血が通い始めるのはいつか？ それは、その言葉を通して一人の人を知る時です。語学じゃない。単語じゃない。文法でもない。その言葉を通してある人を知りたい。その人の喜びや苦しみや、その人の思いをくみ取りたい。そして私の心をできればその人に知ってほしい。それがある時、言葉は生きる。私の発想は、ひょっとしたら、若い時に読んだ「我と汝」という本からも来ているかも知れませんね。「始めに関係がある」とイスラエルの哲学者ブーバーは言いました。我と汝……Ich und du という人間として向き合う関係があって、生きた言葉は始まる。

大東で話した時は、日本語の話になりました。夫婦の言葉。親子の言葉。あなたと私の言葉。そこにまず何かがあれば言葉は死ぬ。どんなに飾っても、どんなに正確でも、本当の所は通じはしない。しかし、もしそこにそれがあつたら、神の言葉に発振・駆動された愛が流れて小さな信頼でも生まれたら、私たちの不完全な大阪弁が生きてくる。もどかしい日本語が息を吹き返す。ちなみに、大東でのテキストは創世記 11 章でした。主はそこで全地の言葉を混乱させた。……ところで、今朝は何語の話になるのかお解りでしょう。少なくとも四人の方は既にお気付きだ。「いや分からない」なんか言う人には単位は上げないですよ。

私たちは、父の思いを知りたい。イエス様のお言葉の一つ一つに父の思いが込められています。パウロはどんなつもりでローマ書のあの言葉を書いたのか？ ヨハネが経験したイエス様はどんな命に溢れていたか？ 私たちの心はもう逸っているのです。このハートの高鳴りがあれば良い。発音、不正確で結構。試験の成績は B でも C でも構わない。……A であればなお良いが。

「始めに関係がある」とブーバーは言いました。私を愛して下さった方との関係。その方のお心をこの国語を通してくみ取って自分のものにしたい。

今朝、単語を 15 個習う前から、あなたの心はもうその気持ちで一杯だとしたら……。動詞の活用形を 6 個暗記する前から心は燃えているとしたら……。中国語の先生の言葉をそのまま「あなたのギリシャ語、モノになるかもよ」と申し上げて一人一人に勇気を持って頂きたいのです。

最後に、掲げたテキストの手前、やはりあの問題に帰って結ばねばなりません。果たして、御言葉に込められた聖霊が、閉ざされた心を外から無理にもこじ開けてくださるのか……？ それとも人がまず内から扉の隙間を恐る恐る開けかけた時に、それッと聖霊が助けてワイド・オープンになさるのか……？ とにかく、御言葉が「生きて、力を発揮」する時には、神の息吹である聖書が人を打ち砕いて「アーメン、主よ、信じます」と告白させる時には、そこに何が出来ているのか？ まずそこに「我と汝」のチャンネルが生きています。神が「どうしても与えたい」と熱中なさるその神の思いと、「どうか受けさせて下さい！」という人の思いが、ピッタリ、波長が合っているのです。そのチャンネルは一言で言うなら「罪と義」「死と命」の事柄への集中です。それでも、そこからもう一つ「聖霊が先か、人間の心が先か」執念で確かめたい向きは、これは卵屋さんに決めてもらうしかないでしょうね。

(1988/09/21, OBS)